

いま再び教父の話をしよう！

出村 和彦

教父研究会は、加藤信朗先生、泉治典先生、今道友信先生、K・リーゼンフーバー先生を發起人と
して一九七六年秋に創立され、年四回の例会を重ねてきた。

かつて泉先生は「私達は長い間、古代と中世の哲学、アウグスティヌスやトマスの哲学と神学、そ
して聖書を学んでのちに教父研究に入ったのであるが、これは迂路のように見えて決して迂路ではな
かったと思う。つまり私達は、長い伝統を持つ欧米の教父学を模倣するとか、最初にまず教父学の範
囲と方法を決めてかかるということではなく、あるいはニカイアⅡカルケドンの結論に沿ってだけ測る
ということはないで、むしろ哲学と神学の全体的な関わりを省察したうえで、いよいよもってそれ

の根源へと立ち帰るように促されたのである」(『パトリスティカ』第二号「巻頭言」)と述べられた。また、リーゼンフーバー先生は、「教父の思想は、個々の著者の民族的また個人的な性格によってだけでなく、時代や教義上の立場によって、相対立するほどの豊かな多様性を示している。しかしこの緊張は、ある意味で共通の考え方、相互に結びついた現実把握によって包括されている。この現実把握は、古典古代の伝統に対しても、中世のスコラ学に対しても、特徴的なものとして際立っており、教父研究のもつ比類なき魅力をなしている」(『パトリスティカ』第三号巻頭言)と指摘された。教父たちの「多様性の中の相互に結びついた現実把握」を研究することを通じて、「根源への立ち帰り」を果たすという両先生の方向性に私は共感して、曲がりなりにも「教父研究」を続けてきたとも言える。

我々と関係の深いチャールズ・カンネンギーサー先生は、北米教父学会の会長であった一九九〇年に「Bye, Bye, Patristics」と題する就任演説を行い、フランスで二〇世紀を通じて培われた「教父学」の継承は不可能になったと告げた。他方、「教父研究」は「初期キリスト教研究」として様々な広がりを見せている。「日本でどうしてそんなにも熱心に教父が研究され原典が翻訳されるのか」という先生の問いかけに、私は、「キリシタン時代からまだ四〇〇年ほどの日本・東アジアのキリスト教は、〈初期キリスト教時代〉に他ならないから」と応じたことがあり、その気持ちはいままも変わらない。今道先生がかつて「教父学の現在」を論じた提題で「自分の研究はパトロロジャなのか、パトリスティカなのか、哲学史なのか、神学史なのか。いまいろいろに研究が進んできている段階では、自分は何をしてきて

いるのかを考えてみなければならぬだろう」(『パトリステイカ』第二号、八〇頁)と締めくくられたお言葉は、確かに、古典・ヘレニズム哲学研究と古代末期史学研究がますます進展する中で、改めて重みを持って迫ってくる。「いま我々が教父を研究するとは、何をどのように研究することなのか」と。

答えは一通りではない。ともあれ、年に四回何らか「教父」に関わるテーマで共同の探求を続けてきたことはそれ自体実に貴重なことであった。会場を提供くださった聖心女子大学、明治学院大学、上智大学の関係各位にこの場を借りてお礼申し上げたい。

「人類が全地表を一つのものとする地球化時代」のいまを生きる知恵が求められる中で、加藤信朗先生が「古代地中海世界のなかでキリスト教が一つの宗教として形をととのえるに至った原点に立ちかえり、その理念的支柱となった教父の神学・哲学の歩みをわたしたちアジア人の目と心で学び、究めることは極めて大切なこと」(『パトリステイカ―教父研究―』創刊号巻頭言)との英断で本誌が刊行されたのは一九九四年であった。欧文 Patristica の刊行も編集委員の尽力によって本年 *Volume* を企画するに至っている。これらを維持して、内外から寄せられる教父研究会への期待に伝えていければと思う。

さて、教父研究会は二〇一三年六月の総会で会則を改正し、〈学会〉としての組織を一層整備して運営していくこととなった。これまで以上に、中世哲学会、東方キリスト教学会、西洋古典学会等の国内学会との連携を深めていくことになろう。柴田有先生、宮本久雄先生が会長として尽力されたように、若手人材による発表の機会をつくり、多方面の研究を大いに奨励する方向は堅持していかなければならぬ

い。と同時に、一人の提題者が徹底的に論点を掘り下げた提題を行い、会員皆がじっくりと傾聴し心ゆくまで討論するゆつたりとした時の過ごし方を大切にする研究会の伝統も守っていききたい。

また、教父の原典翻訳の相互協力の場を開きたい。一九八〇年代から二〇〇〇年当初にかけて、若き日の会員の多くが『中世思想原典集成』（上智大学中世思想研究所編）の事業に参加したが、教父研究の礎を築いたとも言える。出版事情厳しい折ではあるが、未翻訳の重要著作を補完するような企画があれば会員で情報交換しながら、二一世紀の教父集成を目指していければと思う。

もとより教父研究は国際的かつエキュメニカルに開かれた領域である。とりわけ、二〇〇四年以来毎年オーストラリアとアジアで交互に開かれている「アジア環太平洋初期キリスト教会」(APECSS)は国際研究集会を通じて研究を進める上で良き励みになろう。本年九月には東京で開催される。例会に準ずるものとして参加を促したい。

さあ、教父研究会に集いて、心を開いて教父の話をしましょう！